Chongrak 博士およびフィリピンの Ouano 博士が会期中に筆者を訪れ、AIT（アジア工科大学）の援助の下にタイの Bangkok での開催を申し出られたのは喜ばしい限りであった。会期中の組織・プログラム合同委員会での申し出がなされ、UNEP の Deshpande 博士が財政的援助を与えると発言され、第2回会議開催の見通しがついた。勿論、正式提案は IAWPRC にタイ国内委員会より後日なされ、テーマもタイ国内委員会により決定されるはずである。

このようにして、国連の“Drinking Water Supply and Sanitation Decade.”（飲料水と環境衛生の10年）の一環として開催されたこの会議が成功裡に終わったのは、環境庁、厚生省、建設省の御支援、組織委員会およびプログラム委員会の皆様、JSWPR 事務局の皆様の協力の賜物であり、心から感謝の意を表する次第である。この経験は、1990年東京で開催される第15回 IAWPRC 大会の準備と運営に生かし、ぜひとも同大会を成功させたいと祈念してやまない。

IAWPRC 第1回アジア会議報告*

松 尾 友 矩

アジア会議（正式には国際水質汚濁協会（IAWPRC）による生活排水、し尿処理・処分に関する第1回アジア地域会議、IAWPRC's First Asian Conference on Treatment, Disposal and Management of Human Wastes）が終わって2カ月近くが過ぎ、ようやく残務整理も進み原稿の修正を待って、Water Science & Technology の原稿としてロンドンへ発送するところまでこぎつけることができた。今回のアジア会議の開催は法人化した日本水質汚濁研究協会にとっては初めての国際会議の経験であったが、筆者個人にとっても国際会議のお世話をするのは初めての体験であった。プログラム委員会の Chairman をやらないかといわれた時は正直いって極めて気軽に考えていたのであったが、今年の7月を過ぎた頃から、たよりにしていたプログラム委員会の主要メンバーが外国出張など多忙

な日程であることを知らされてからは、状況はにわかには緊迫したものとなってきた。途中どうなることかと心配をかけたむきも多々あった訳であるが、海外参加者からも「Well Organized Conference」であったといわれ、なるべくお金をかけないで手造りで仕上げた会議としてはまずまずの成功であったと思われる。ここで改めて、組織委員会、プログラム委員会、当協会関係者各位のご支援に感謝する次第である。以下において、実施経過、参加者についての統計などを示し、プログラム委員会からの報告としたい。

実施経過

前述したようにプログラム委員会の Chairman をいかに気軽に引き受けていたかは、この「経過」を書く段になって一層はっきりしてくる。過去3年分の手帳を調べているのだが的確な情報はほとんど残っていないのである。しかし、3回にわたるアナウンスメントの作成、発送、アブストラクトの回収、原稿依頼、原稿回収、プレプリント、プログラム、参加者リスト、レセプション招待状の印刷、会場設営、といった作業はその時々極めて厳しいタイムリミットを持って突然に現れてきた。経験のなさからくる準備の悪さによるものではあるが、本務のある人々の負担をなるべく小さくしようということと裏腹の関係でもあった。

1983年6月中旬に第1回のアナウンスメントの発送を行った。これは金沢大学松井三郎先生が原案を作成された。主要内容は会の目的、テーマ、期日、開催

Tomonori Matsuo

昭和40年 東京大学大学院修士課程修了

48年 同大学工学部都市工学科助教授

57年 同大学教授
工学博士

* The Report of IAWPRC 1st Asian Conference, 昭和60年12月25日受理

地(東京), 論文募集要領, 参加希望をつの返信用ハガキからなっていた。第2回のアナウンスメントは1984年8月に発送した。このアナウンスメントでは会場を国際文化会館とすること, 登録料(Registration Fee)を会員で35,000円にすること, ホテルの予約の案内, Post Conference Study Tour の案内(この企画は最終的には中止となったが, WHO などの国連機関からの援助を受けた参加者を受け入れやすくするために不可欠とされていた), などが追加された。会場を国際文化会館に予定したのは最大の参加者を130名と推定したことであり, 登録料を35,000円以上としたのは経費を原則的に参加者に負担してもらうという考え方によっていた。同時通訳もないのに35,000円は高すぎるという声もあったが, 国際会議イコール寄付集めというような体質を避けたいという判断が関係者の間で一致していた。同時通訳のない会議もやればそれなりにできるということが判ったことも大きな収穫の1つであったと考えられる。

アブストラクトの提出期限は1984年11月30日とされていた。11月の中旬をすぎてもアブストラクトの集まり具合はあまり芳しいものではなかったので若干のあせりもあり関係省庁へ発表件数確保の協力方の依頼などをしてまわった。しかし, 12月に入る頃から申し込み数が増えだし, 1985年1月中旬にプログラム委員会を開くまでには結局21の国と地域から109件の申し込みが得られることとなった。締め切りにおくれがちななるのは洋の東西を問わない事情があるようである。

提出されたアブストラクトはプログラム委員の間で手分けして査読を行った。海外からの委員には郵送にて判定をお願いした。論文数をしぼりプログラムの概要を決めるプログラム委員会を1月18日, 19日にUNEPのDr. Deshpandeの来訪を得て開催し, 口頭による発表55件, ポスターによる発表38件を採用することが決定された。採択率からいえばわが国からの参加者にとっては不利な結果になったが, 「国際」の実を取るための配慮からとはいえ, わが国からの参加者にはその意味で申し訳なく思っている。また, 会議への反応の良い点に気を強くして, 会場を当初の予定の国際文化会館から建築会館へと変更することになった。

このプログラム委員会の決定を受けて, 1985年2月中旬に各著者への最終的な発表意思の確認の照会を行った。そして4月中旬にプレプリント用の所定の原稿用紙を発送し, 7月15日の締め切りを待つこととなった。この時期は一方で第3回のアナウンスメントの作成と協会雑誌への会告の準備を進める時期でもあった。会告への原稿は発行月の3カ前に用意しなければならないことは, 不慣れからくる盲点であり, 雑

誌編集の責任者である東大生研鈴木基之先生には迷惑をおかけすることになった。また開催を知らせるポスターの作成・発送, 関係学協会・雑誌・新聞への広報関係は公衆衛生院真柄部長にお願いしていた。

7月に入ると次第に原稿が集まり始めるのと並行して登録の申し込みもにぎやかになってきた。この頃に必要な作業としては論文の受け取りと登録料の領収書を発行することである。これらの作業は主として清家敦子さんに週3回程度のパートでお手伝いをしてもらうことになった。清家さんにはこれ以降, ワープロ操作, 会計, アルバイターの手配など雑件すべてをお願いした。遅れている原稿への国際電報による確認, 国内へは電話による催促を重ねながら8月中旬プレプリントの原稿を東大生研鈴木先生へ渡した。プレプリントの印刷担当は鈴木先生で, 好評を博した表紙の写真は環境庁が今夏指定した名水百選の1つを選定されたものである。この写真にかかわる後日談としては写真の左右が反対であったということがある。どなたか写真のウラオモテを見わけ一般的な方法をご存じの方はおられないだろうか。

8月に入る頃から, 事前登録による参加者数が伸びないやみの傾向が心配されてきた。そこで急ぎ潜在的な人財源である下水道関係部門と民間企業各社への働きかけを進めることを考え, 建設省中本下水道部長へお願いに行く一方で会場内でのカタログ・コーナーの設置への協力を賛助会員各社へ呼びかけることを行った。カタログ・コーナーの手配, 関係業界への依頼などは協会に今年より設置されている産官学協力委員会の早川委員長(西原環境衛生研究所)に大変お世話になった。これらのご協力のお蔭で9月に入ってから参加者増にはみるべきものがあり, 最終的な有料登録者が185名となり予想参加数の最大値に達する盛会とすることができた。参加者が増えて研究交流が進むことが会の成功を示すものであると考えていた当事者にとってはなんともたのしい援軍であった。

個人的には8月24日から9月1日までコペンハーゲン(デンマーク)へIAWPRCのTask Groupのシンポジウムに出席することになり, あわただしさは倍加されていた。

9月に入ってから事務的作業では, プログラムと参加者リストの作成(東大都市工 松尾, 大垣), 記念品のボールペン, レポート用紙などの手配およびウェルカムパーティー・レセプションの準備(環境庁 森谷, 公衆衛生院 真柄, 国包), 会場内ポスター発表用掲示板の製作準備(東大 大垣), 会議準備のチェックリストおよびスライド関係調整・準備(公害研 須藤, 稲森, 細見), 風呂敷手配および最終日に予定した海外

参加者への見学会の手配（下水道事業団 村上）などが主要なものであったが、それぞれに担当者を決め、連絡を取りあいながら進めていった。しかし、その時になってみないと問題のありかがわからないことも多く、それぞれの負担はかなりのものであったと想像される。

なお、須藤さんを中心とする公害研グループが作成して下さった会議準備に関するチェックリストは大変有効であったので、本稿末尾に参考資料として示しておきたい。各種の会議など企画される方にとって必ずやお役に立つものと思う。

プログラム、参加者リストの作成は基本的には前年に開かれた IAWPRC のアムステルダム会議の際のものを下敷きとして使った。アムステルダム会議の際の資料は各種案内状に至るまで持ち帰るよう心がけていたかがあったということである。アムステルダム会議は800名規模の会議であったが、実質的には5名程度の人員で切りまわしたと聞いており、200名規模のものができないはずはないということも大きな支えであった。筆者にとっては、アムステルダム会議での見聞は大きな意味を持つものであった。

参加者リストはDBASE IIというソフト（鈴木先生から借用）を使ったが、使い方に不慣れであったため入れたつもりのデータが消えていたりといったトラブルも起きて、お蔭で、印刷屋さんへ原稿を渡す前日は午前4時過ぎまでコンピューターのキーをたたくはめとなってしまった。今回の準備の中で最もヒヤリとした瞬間であった。また最後まで森谷さんとの間で判断にまよったのが、レセプションの人数の予測であった。協会会長が主催するのにあまり貧弱ではこまるなどの意見もあり、参加者数も増加の傾向にあったため若干多めに注文したのであった。結果としては翌日の都清掃局への Solid Wastes を増加させる形になってしまい、ごみ山に集まるスカベンジャーの話なども出た会議での討論内容との間にギャップを感じさせられることとなった。しかし、2時間半位の間さびしい気分にはならないですんだ点は多とされよう。

論文発表

論文発表は口頭発表とポスター発表の2本立てとした。口頭発表は当初52編予定していたが、残念ながら海外からの参加者に6件の欠席者があり欠番となった。ポスター発表は25編予定していたが、郵送された写真を掲示したり、代理の人が掲示をしたりで欠番は2件であった。まずまずの成績であろう。しかし、全般的にはポスターを前にしてのホットな議論が展開されるはずという期待とは若干ずれてしまった感もあった。不慣れであったという点とコーヒブレイクの

サービスを行う場所の設定にも問題があったためと思われるが、ポスター発表の発表技術（プレゼンテーション）にはもっと工夫していく必要もあるといえよう。

論文は10のカテゴリーに分けたセッションで発表されたが、カントリーレポート、ケーススタディ、プランニングに関するセッションで紹介される発展途上国での実情と後半において日本からの発表者だけになってしまった硝化脱窒および生物的脱リン技術の発表内容あるいはテーマは同一の場所で論ずるにはあまりにも差が大きかったようである。また討論の中で面白かったのは適性技術（Appropriate technology）とは何かという問いかけであった。この問題はある意味でもあまりにも根源的な問いかけであるためなかなか議論をしにくい性質のものであるが、今後の途上国との研究協力あるいは援助を考えていくときには常に反復されて問われるべきものと考えられる。

それにしても、カナダの女性や、アメリカ、ヨーロッパの研究者達が東南アジアの最前線の具体的な事例にふれながら活動をしていることは我々にとっても刺激的なことであった。わが国からもすでに多くの方々が最前線での仕事に従事しておられることではあるが、明治初期以来日し、日本の上下水道の父といわれ、東京で客死した W.K. Burton の例を述べるまでもなく、その国に本当の影響を与えるような取り組み方がさらに望まれるのではないであろうか。

論文の内容とは直接関係はないことではあるが、「どうも韓国と日本ははりあっているように思える」との感想を述べた第三国の方があったという話が聞こえてきた。出たり入ったりしながらも常時会場にいた筆者にとってはいたって奇異に感じる言葉であるが、国際的な関係の機微にふれるところなのかもしれない。しかし筆者の個人的感想としては、たとえ「はりあい」があったとしてもそれは研究者個人どうしのものであり、その意味での「はりあい」は国内においても当然にあるのであり、「はりあい」のない研究者集団は極めて不活性な状態でもある訳であるから、そのことを必要以上に国レベルの話にしてしまうのは不適切なのだと考えている。国際化していく研究交流を活性化していくためにはフランクな討論は不可欠でさえあるのだが、別の見方もあることは心しておく必要もあるのかもしれない。

発表論文リストは資料として別に示す。

会議の成果

今回のアジア会議の成果はと問われる時、まずいえることは、かなりの程度の参加者を得て、会議が成立したことが第一の成果であると思う。

最終的な集計による参加国（地域）数は32に達し、

地域的にいってもアジアを中心として、南北アメリカ大陸、東西ヨーロッパ、中近東、アフリカと極めてバラエティーに富んだ分布となっている。社会体制の相違、経済状態の相違、工業化の相違と大きな相違点を持ちつつも人間生活に直接かかわる環境問題をなんとかしていかなければならないという点において研究の交流、人間どうしの交流が友好裡に進められたことはなにもものにも代えがたい成果であったといえよう。これを機会にいろいろなレベルでの交流が続き、発展していつてくれることを願うものである。参加者に関する資料は付表に示すとおりである。

第二の成果はあまり大いばりでいえるようなものではないかもしれないが、我々の分野に近いところでは、初めての英語だけによる国際会議をまがりなりにも成功させたということを挙げたいと思う。筆者自身不慣れであり、不安でいっぱいであったが、案ずるよりは産むが易しといった感じもしている。しかしそれは一重に参加された方々の積極的な態度、実力に支えられたものであり、ただただ感謝申し上げるところである。日本の水質汚濁の問題を扱っている人々の実力にはすばらしいものがあり、今後色々な形で交流に際してより積極的になり得ることが明らかになったことは高く評価されよう。このエネルギーの持続が望まれるところである。国際会議とは色々な英語、例えば、American English, Japanes English, Chinese English, Thai English, Korean English, German English, ……と無数の英語が許されるところであると考えられる。遠慮は不必要であろう。

あえて感想を述べれば、日本人の発表などが通じにくいことがあるとすれば、それは語学のためなのではなくて日本語の表現の仕方そのものにある欠陥によるものであるように思われる。単一民族としての一種のなれあい、いたわりあい、依頼心が、結果として論旨の不明確さにつながり、説得力を弱めて印象を薄くしてしまうことになっているように思うのである。うまい英語であるに越したことはないが、最大のポイントは何をどんな論理構成で主張しているかにあると思われる。日本語の論文においても論文の書き方そのものを見直すことが必要なのかもしれない。

第三の成果はとにかくお金をかけないで会議を実施できたということを挙げたい。参加費が割高であるという苦情も国の内外からかなりきいていたが、各自がこの程度の負担をしてくれるなら、今回規模の会議なら開催が可能であるといえる。今回お願いした外部からの援助は、鹿島学術振興財団国際研究集会助成(50万円)、スガウエザリング技術振興財団国際交流助成(20万円)だけであった。大口の参加者をバックアップし

て下さった JICA, UNEP, 国連大学, WHO, 国内各役所, 大学・研究機関, および企業に対して深く感謝の意を表するものである。ちなみに総経費は750万円程度であった。

おわりに

予定の紙数も尽きてきており、何とかまずまず1つ終わることができたという自己満足にひたっている現在ではあまり有効な反省も出てこない訳であるが、まわりで見ておられると色々気付かれたことも多いと想像している。何かの折にご注意いただければと思うし、次に企画される方にとっては他山の石として生かしていただけたらと願う次第である。なお、本アジア会議の組織委員会およびプログラム委員会およびセッションの議長のリストを示してそのご指導、ご協力に感謝の意を表する次第である。

中組織委員会

松本順一郎 委員長, IAWPRC 副会長, 東北大学工学部教授
合田 健 日本水質汚濁研究協会会長, 国立公害研究所水質土壌環境部長
久保 赳 (社)日本下水道協会理事長
金光 克己 (財)日本環境整備教育センター理事長
松尾 友矩 プログラム委員会委員長

中プログラム委員会

松尾 友矩 委員長, 東京大学工学部教授
巖 元鐸 嶺南大学教授, 韓国
Deshpande, R.D. Regional Adviser, UNEP
Polprasert, C. アジア工科大学助教授, タイ国
須藤 隆一 国立公害研究所陸水環境研究室長
村上 健 日本下水道事業団計画部上席調査役
真柄 泰基 国立公衆衛生院衛生工學部長
鈴木 基之 東京大学生産技術研究所教授
松井 三郎 金沢大学工学部助教授
森谷 賢 環境庁水質保全局水質管理課審査官

中口頭発表セッション名および議長(敬称略)

1. Country Reports
Minnatullah, K.M. (バングラデシュ)
真柄泰基(国立公衆衛生院)
2. Case Studies
Deshpande, R.D (UNEP)
須藤隆一(国立公害研)
3. Onsite Treatment and Fish Pond
Zhu, Z. (中国)
村上 健(日本下水道事業団)
4. Planning and Management
Soemarto, S. (インドネシア)
松井 三郎(金沢大学)
5. Rotating Biological Reactor and Biological Filter Ouano,
E.A.R. (フィリピン)
渡辺 義公(宮崎大学)
6. Anaerobic Process

Furedy, C. (カナダ)

鈴木 基之 (東京大学)

7. Microbial Pollution and Water Pollution

Polprasert, C. (タイ)

森谷 賢 (環境庁)

8. Aerobic Process

Kreissl, J.F. (アメリカ)

宗宮 功 (京都大学)

9. Denitrification and Biological Phosphorus Removal

厳 元鐸 (韓国)

大垣 真一郎 (東京大学)

10. Land Disposal

Cordoba (コロンビア)

柏谷 衛 (東京理科大学)

国 (地域) 別参加者

ア ジ ア 154名	バングラデシュ 2, 中国 4, ホンコン 1, インド 3, 日本 111, 韓国 8, マレーシア 1, ネパール 1, フィリピン 3, シンガポール 2, スリランカ 4, 台湾 6, タイ 4, モルジブ 1, インドネシア 3
南 北 ア メ リ カ 15名	カナダ 2, U.S.A. 6, ブラジル 2, チリ 1, コロンビア 1, パラグアイ 1, ベルー 2
ヨーロッパ 9名	デンマーク 2, ハンガリー 1, ノルウェー 2, ソ連 1, 西ドイツ 3,
中 近 東 4名	イラン 2, サウジアラビア 1, トルコ 1
ア フ リ カ 3名	エジプト 2, ケニア 1

国内所属別参加者

大 学	32名
民 間 企 業	44名
官 公 庁 他 35名	下水道事業団 5, 国立公害研究所 4, 土木研究所 4, 環境整備教育センター 4, 公衆衛生院 3, 地方下水道局 6, その他 9

アジア会議運営チェックリスト

1. 事前の準備

参加者へのインストラクション

ポスターセッションのインストラクション

クエスションスリップ

会場付近の地図

ポスターセッションのタイトル

会場・控室のチェック

会議の看板 (玄関および会場)

セッション No, ペーパーNo

2. レジストレーション

参加費の徴収, 領収書の発行

名札

各種案内 (インストラクション, パーティ, エキスカーション, ホテル, 都市交通など)

前刷

参加者名簿

記念品

封筒

招待者のリボンなど

3. オーラルセッションの受付

スライドの運搬・返却

スライドの映写

ライト

マイク

時間通報

ペーパーNo の表示

4. ポスターセッション

掲示板の配置

タイトルの貼付

インストラクションの配布

5. その他

受付・スライド受付のデスクの準備

インフォメーションデスク

コーヒーコーナーの用意

文房具

領収書

マスコミへの対応

プロジェクターの準備

6. 会場運営の指揮

Oral Session と Poster Session 発表一覧表

○各国の報告

日本における家庭排水対策の現状と今後の方向

藤原, 日本

中国の都市と農村におけるし尿処理と再利用

Z.Zhu, 中国

韓国におけるし尿処理

W.T.Um and S.W.Kim, 韓国

フィリピンにおける家庭排水の処理と処分

E.A.R.Quano, フィリピン

低所得層を対象とした排水処理プログラムーバングラデシュからの報告

K.M.Minnatullah, バングラデシュ

日本における家庭排水の処理

加藤, 日本

○ケース・スタディ

タイの農村部における衛生計画の進展ー国際飲料水供給及び衛生年間に関連して

S.Muttamara and H.P.Ricarte,Jr., タイ

発展途上国における簡易な排水処理技術の進歩とその意義

R.W.Seabloom and D.A.Carlson, アメリカ合衆国

し尿の完全処理

J.H.Tay, シンガポール

腐敗層汚泥の処理—スカンディナヴィア諸国における実際

A.S.Eikum and B. Paulsrud, ノルウェー

環境衛生改善に関する日本の国際協力

海野, 山村, 日本

○敷地内処理と養魚池

農村地方におけるし尿の衛生と利用

K.C.Shin, ドイツ

し尿の安価なリサイクルと再利用—敷地内処理システム

G.Sagar and B.K.Gupta, インド

北アメリカ及びヨーロッパにおける生物処理を利用したトイレット

J.F.Kreissl, アメリカ合衆国

養魚池の家庭排水処理への応用—ケーススタディ

K.P.Krishnamoorthi, B.B.Sundaresan, A.V.J.Rao and

J.P.Kotangale, インド

養魚池による腐敗層汚泥のためのモデル

K.K.Bhattacharai, C.Polprasert and B.N.Lohani, タイ

○計画と管理

都市効外における固形廃棄物管理の改善のための基本理念と計画

桜井, 日本

発展途上国における人畜し尿管理のための戦略

B.N.Lohani, タイ

都市排水の処理において変わりつつある価値

C.Furedy, カナダ

適正な衛生技術の選択に影響を及ぼす因子

真柄, 国包, 青山, 日本

日本におけるし尿処理の進展に関する総説及び新概念

合田, 日本

し尿からのバイオガスの回収—アジアからアフリカへ

I.Kyu and G.Muturi, ケニア

日本における家庭排水の汚濁負荷因子

浮田, 中西, 関根, 日本

○回転円盤法と生物フィルター

無煙炭灰の固定生物膜プロセスにおける支持体としての利用

K.S.Kim and E.Choi, 韓国

台湾熱帯気候下における回転円盤システム

P.S.Cheung, 台湾

家庭排水のコンパクトな処理プロセスとしての接触生物フィルターに関する研究

宗宮, 津野, 小野, 日本

固定活性汚泥法による下水処理の簡易化

A.Mesdaghinia, イラン

生物流動層によるし尿処理

H.G.Kim and Y.D.Lee, 韓国

好氣的バイオフィルターを併用した嫌氣的バイオフィルターによる家庭排水処理

稲森, 須藤, 合田, 日本

嫌氣的付着生物膜を利用した排水処理システム

A.N.Khan, インド

アップフローフィルターを利用した2相式嫌気分解システム

田中, 松尾, 日本

浮遊担持体を用いた排水の嫌気処理

Y.M.Oh and B.S.Yang, 韓国

し尿と腐敗層汚泥との混合嫌気分解システムの数学モデル

S.R.Ha, K.H.Lee and S.E. Lee, 韓国

し尿の嫌気分解プロセスの改善

野池, 松本, 日本

○微生物による汚染と水質汚濁

し尿及び処理水中の微生物

川村, 金子, 日本

コリファージの微粒子への吸着

大垣, A.Ketratenakul, S.Suddevgrai,

U.Prasetsom and O.Suthienkul, 日本, タイ

ホンコン, ポートシェルトーにおける貧酸素水塊のモデリング

J.K.Jensen, A.M.Hansen and P.Mortensen, デンマーク

CBODとNBODのパラメータ決定に関する研究

H.W. Lee, 中国

○好氣的プロセス

台湾における集落排水の生物処理プロセスの特徴

C.F.Ouyang and T.J.Wan, 台湾

オキシデーションディッチプロセスの性能評価

松井, 木俣, 日本

活性汚泥法排水処理の高性能化

A.Donath-Jobbagy, J.Kalman and R.Hajos, ハンガリー

小規模排水処理プラントの運転と維持

高橋, 日本

間欠曝気プロセスによる窒素, リンの同時除去

早川, 辻, 浜本, 日本

○脱窒及び生物的リン除去

循環曝気型生物学的脱窒法によるし尿の窒素除去技術の進展

村田, 清水, 山田, 木村, 日本

硝酸化させた処理水の返送によるし尿処理

鈴木, 遠矢, 日本

機械的固形物分離と生物学的プロセスによる新しいし尿処理

村上, 石井, 梶, 日本

流動層を用いた汚泥処理のイオウ脱窒の新方法

松井, 山本, 日本

小集落下水処理における窒素, リン, BOD, の同時処理のための回分式活性汚泥法処理装置の性能

岡田, 須藤, 日本

○土壌処理

し尿の土壌処理の長期的影響

M.S.M.Saber, エジプト

家庭排水の土壌処理

山浦, 鈴木, 小林, 勝野, 荻原, 田口, 日本

ドイツにおける排水の土壌処理の実験
R.Boll, H.Dernbach and R.Kayser, ドイツ
土壌浸透処理の数値シミュレーション—収支に基づいて
鈴木, 川島, 川西, 日本

○ポスターセッション

- P-1 バンコクにおける都市排水処理に関する実験
住山, 松下, K.Suwanarat, 日本, タイ
P-2 雑排水処理システムのコミュニティによる管理
おばた, 盛岡
P-3 コミュニティトイレット
A.K.Sharma and T.P.Sharma, インド
P-4 500人規模のコミュニティイレット用のバイオガスプラント
G.Sagar and B.K.Gupta, インド
P-5 合衆国における排水の敷地内処理
J.F.Kreissl, アメリカ合衆国
P-6 インドにおける排水の魚養殖への利用, 総説—政策
及び研究への提言
M.C.Nandeesh, H.P.C.Shetty and P.Keshavanath, インド
P-7 廃棄物埋め立て地からの浸出水の回転円盤法による処理
石黒, 渡辺, 益田, 日本
P-8 回転円盤法における物質移動スケールアップ
山本, 松尾, 日本
P-9 プラスチックメディアトリックリングフィルターを用いた経済的排水処理プロセス
W.S.Chung, アメリカ合衆国
P-10 流動層 SMAR による家庭排水処理に関するコスト最適化及びエネルギー評価
I.C.Agarwal, R.K.Arora and R.K.Dwivedi, インド
P-11 し尿処理プラントにおけるトリハロメタン先駆物質の挙動とその制御
佐藤, 松本, 日本
P-12 排水汚泥処理の寄生虫不活性化

- R.S.Reimers, D.B.Mcdonell, A.J.Englande,Jr.,
M.D.Little and W.D.Henriques, アメリカ合衆国
P-13 河川に対する汚濁負荷予測のためのポリュートグラフシミュレーション
関根, 浮田, 山本, 中西, 日本
P-14 Lemnaceae プラントにおける重金属の蓄積に関する実験的研究
加須, 釘本, 田中, 滝本, 日本
P-15 深さ10mのUチューブ曝気層によるし尿処理の設計に関する考察
村田, 山田, 木村, 日本
P-16 小規模酸化池の処理効率—数値シミュレーション
川島, 鈴木, 日本
P-17 低気温下における土壌被覆式接触曝気層による排水処理
松本, 藤沢, 木村, 斉藤, 中村, 日本
P-18 オキデーションディッチによる下水処理に関する研究
衣笠, 堀井, 笠, 日本
P-19 し尿処理プラント汚泥の新しいフロック化法とベルトフィルタープレスによる脱水竹内, 橋本, 日本
P-20 脱リンを強化した活性汚泥法における脱窒反応の影響
柴田, 深瀬, 宮地, 日本
P-21 し尿処理におけるオゾン利用
海画, 居安, 柏原, 日本
P-22 土壌利用排水浄化法
新見, 日本
P-23 空気吹き込みによる自動加熱型気好熱分解の技術と実際
K.Breitenbucher, ドイツ
P-24 揮発性有機物除去のための吸着剤としての廃汚泥の利用
P.C.Chiang and J.H.You, 台湾
P-25 合衆国における低コストな排水収集システム
J.F.Kreissl, アメリカ合衆国